大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

曹禺『雷雨』周樸園の形象について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-04-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 瀬戸, 宏 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017975

都市文化研究　第25号　2023年3月　32-40頁
Studies in Urban Cultures Vol. 25, March 2023, pp. 32-40

◇研究論文◇

曹禺『雷雨』周樸園の形象について

瀬　戸　　宏

◆要　旨

曹禺『雷雨』は，中国話劇の代表作である。『雷雨』の登場人物，周樸園は『雷雨』の主な舞台である周家の主であり，炭鉱会社の会長でもあり，『雷雨』のカギを握る人物でもある。周樸園は『雷雨』登場人物の中で論じられることが最も多い人物であり，しかも時代の変化に伴って解釈が大きく変更された人物でもある。本稿では，周樸園の評価変遷史を概説した後，『雷雨』本文に即して周樸園の形象の特徴を以下のように探った。

人民共和国建国後から改革開放期以前の認識は，当時の時代思潮を反映して，周樸園は封建遺制が強く残る資本家であり否定的人物というものであった。改革開放期以後はやはり時代思潮を反映して，必ずしも悪人ではなく複雑な人間性の持ち主とするものである。周樸園の出身家庭は恐らく清朝高級官僚であり，周樸園のドイツ留学はちょうどドイツでの社会主義運動の高揚期にあたっており，周樸園はその影響を受けた。帰国後の侍萍との恋愛は，彼がドイツで得た理想主義の実践であり，当時の社会道徳に大きく背くものであった。周樸園が家の圧力に負けてその恋愛は破局に終わり，周樸園は金持ちのお嬢さんと結婚した。これは周樸園の理想主義の破産であり，この後周樸園は冷酷な資本家に変質していく。侍萍は追放されたが，周樸園は罪悪感を抱き，侍萍の部屋の様子を約30年間保存した。家長としての周樸園に封建要素が見られるのは確かだが，個人，女性の尊重など近代要素も強い。周樸園は全体としては封建的前近代的価値観と近代的価値観の混ざりあった人物形象である。

キーワード：曹禺，雷雨，周樸園，近代性

一九三四年発表の曹禺『雷雨』は，中国現代文学，中国現代演劇（話劇）の代表作の一つである。物語の緊密な進行につれてしだいに隠されていた資本家の家庭の秘密が暴露されていき，最後に三人の若者が悲劇的な死をとげ，読者・観客に衝撃を与える。周樸園は『雷雨』の主な舞台である周家の主であり，炭鉱会社の会長でもあり，『雷雨』のカギを握る人物でもある。

周樸園は最初の登場時の説明でこう紹介されている。「彼の顔つきには長年の処世と苦労が含まれている。厳しい目つきと偶然口元に現れる冷笑から，彼の日常的な専横，自己肯定，屈強さを見いだせる。若い時のあらゆる軽率，高慢は顔のしわによって深く覆われ，もうわずかの痕跡も探し出せない。ただ彼のごま塩の髪だけが，昔の立派な様子を保っており，豊かに後ろに分けられている。」(註1)

周樸園は『雷雨』登場人物の中で論じられることが最も多い人物であり(註2)，しかも時代の変化に伴って解釈が大きく変更された人物でもある。本稿では，周樸園の評価変遷史を概説した後，『雷雨』本文に即して周樸園の形象の特徴を探っていきたい。

一　周樸園評価の変遷

周樸園の評価について，曹禺研究者・中央戯劇学院教授の晏学は周樸園評価の変遷を次のように概括している。「“文革”以前の文章は，深さ，浅さ，詳細，簡単の別はあるが，基本的に周樸園は否定的人物だと認識していた。二〇世紀八〇年代以降は違っている。多くの論述の中で周樸園は“中世が終わり新時代が始まる時期の中国の土壌から生まれた世代の新人物形象”と考える人もいれば，“階級闘争を綱とする”が廃された後，周樸園は“同情に値する”と考える人もいる」(註3)

作者の曹禺自身が，社会状況の変化に応じて周樸園に対する見解を大きく変えている。

『雷雨』が『文学季刊』一九三四年第三期に発表されてから約一年半後の一九三六年一月に刊行された単行本

『雷雨』（文化生活出版社）序では，周樸園について次のように述べる。

「周樸園の性格はかなり把握しやすい。彼も多くの演技場面がある。たとえば薬を飲ませる場，侍萍と再会の場および第四幕の一人で孤独・寂しさを感じる場で，思索を加えると，（より考慮による節制が必要）より深く演じられるだろう。」(註4)

上演のポイントを述べるだけで，周樸園の社会的位置や肯定的人物かどうかにはまったく触れていない。

ところが，中華人民共和国建国直後の一九五一年，自己の民国期の創作を自己批判した「私の今後の創作への初歩認識」では，まったく別の内容が語られる。

「『雷雨』の中の周樸園は，もとより万悪の封建勢力を代表する人物として現れる。私も力をつくしてあの彼に圧迫された人たちを描いた。」(註5)

一九五八年には，ソ連の演出家の質問に答えて，周樸園について語っている。

「周樸園は封建家族（大地主）の子弟が転化した成功した資本家である。彼は非常な自信家で，自分は十分に“正直”だと思っている。彼らの社会も，彼は“仁厚”“正直”な模範だとみなしている。」(註6)

このような単純化した階級性の理解は，文化大革命期に頂点に達する。文革はその極端さゆえに破綻し，一九七八年一二月の中共十一期三中全会から改革開放政策が始まるが，その直前の一九七八年九月には，曹禺はこう語っていた。

「周樸園という人間は，悪が住み家になってしまった，悪は自分ですら自分が悪人だと思わない程度に達してしまったと言っていい。（中略）彼は自分で良い夫，良い父親，聖人君子だと思っていたが，実際には外では何事もないかのように人を殺し，家庭では独裁で横暴な魔王だった。」(註7)

しかし，思想の解放を告げた十一期三中全会後には，別の周樸園像が語られる。

「周樸園も一人の人間である。資本家には人間性がないと考えることはできない。（中略）周樸園は彼女（侍萍ー引用者）を誘惑したのではなく，彼女に対して真の愛情を抱いたのだ。」(註8)

資本家は悪人だという基本認識は変わらないが，文革終結までの硬直した階級性理解への反省から，資本家にも人間性の存在を認めているのである。曹禺はこの後も周樸園について発言している(註9)が，同工異曲なので紹介は省略する。曹禺のこのような周樸園評価のめまぐるしい変化は，曹禺作品の研究の際必ずしも曹禺の発言に依拠できないことをも示している。

炭鉱会社会長の周樸園は資本家であるが，改革開放政策以前には，資本家階級総体が搾取階級，否定される階級とみなされていただけでなく，個々の資本家も“その階級的本質”によって基本的に悪人，否定的人物だと考えられていた。建国初期の曹禺が語るように，周樸園を地主階級とみなしても同じである。従って周樸園の形象もまず否定的人物という前提から分析が始められていた。ここから，文革終結以前の中国での階級観の単純化，硬直化をみるのは容易であろう。

この単純な階級観の帰結が，文革期の人間観である。文革期には曹禺作品そのものが否定されたから『雷雨』に関する論評はほとんど無いのだが，数少ない文革期の論評は，「『雷雨』の周樸園は，ある炭鉱会社の会長であり，狂ったように労働者の血を吸い，労働運動を鎮圧し，労働人民を侮辱し迫害する下手人であり吸血鬼である」と述べ，「このような顔は人間だが心は獣の老吸血鬼に，曹禺は美化という得意技を尽くしたのである」と曹禺を糾弾している(註10)。

文革終結以前およびその余波がまだ広範に残っていた一九八〇年代前半までの周樸園評は，一九八七年に刊行された潘克明編著『曹禺研究五十年』（天津教育出版社）第一章二「周樸園の形象について」(註11)に整理されている。

それによれば，周樸園は資本家であり否定的人物であることから出発して，資本家の階級性と封建制との関連が，研究の中心であった。周樸園の悪の来源は資本主義か封建遺制かが，議論の焦点になったのである。資本家階級や地主階級は悪人だという前提があったから，周樸園の侍萍に対する愛情は本心か否かも討論の対象になった。一般的な結論は，周樸園の愛情は虚偽であり，部屋の維持など時折みせる人間味は偽善だというものであった。改革開放政策が実施されても，そのような認識はすぐには変わらなかった。その代表は，銭谷融と田本相であろう。

一九八〇年一〇月刊行の銭谷融『<雷雨>人物談』は，周樸園を次のように評している。

「彼はブルジョア階級の教養を受けているが，封建地主階級の思想感情と深い血縁関係を持っている。彼は冷酷，自分勝手であり，独裁的な統治心理を備えているだけでなく，非常に虚偽であり，深くニセ道徳を熟知している。」(註12)

田本相は一九八一年一二月刊行の『曹禺劇作論』で周樸園についてこう述べる。

「周樸園の倫理道徳の精神面貌の中で，封建的なものはブルジョア階級の道徳文明と融合している。だから，彼の思想，作風，気質は混ざり合いの産物なのだが，濃厚な封建色彩を特徴としている。そこで彼の精神の威厳のもとで，この家庭は缶詰のように閉ざされ，少しの自由の空気を吸うことも出来ない。周家は“人を悶死させる”ところなのである。」(註13)

『<雷雨>人物談』『曹禺劇作論』は改革開放以前も含

めて曹禺に関する最初と二番目の個人執筆専著であり，刊行当時は改革開放期以前の単純，公式化された曹禺論を打破する著作とみなされたが，二〇二二年の時点で再読してみるとそれ以前との共通性も強く感じられる。このような一九八〇年代前半までの周樸園論からは，それなりに真摯に研究・討論が行われたことは読み取れるが，階級性の単純化した理解が説得力を失って久しい今日からみれば，すでに歴史的遺物になっていると思われる。

中国では改革開放政策の進展につれて，階級性の単純化を反省し人間性の複雑さに対する探究がしだいに始まった。とりわけ改革開放政策の進展で中共中央の計画的商品経済（一九八四年）や社会主義市場経済（一九九二年）が提起されて以後は，大量の資本家が生まれ資本家の存在と役割が中国国内で肯定されるようになった。それに伴って，周樸園に対する認識も変化していった。先に引用した晏学の発言は，その間の事情を説明している。要約的に言えば，周樸園の形象に複雑な人間性を認め，否定的人物としてはとらえないのである。

本稿では以下，近年の研究成果をも踏まえつつ，周樸園の人物像とその劇中での役割を，作品に即して考察したい。

二　周樸園のドイツ留学

周樸園に限らず『雷雨』では登場人物の経歴は断片的にしか読み取れないのだが，それでもいくつか手がかりはある。『雷雨』から読み取れる周樸園の経歴を記してみよう。

周樸園は一八六七（同治六）年頃に上流家庭に生まれた。事件当時五五歳という人物表の年齢設定，光緒二〇年除夕（一八九五年一月二五日）という侍萍の周家追放，追放の三日前に生まれ事件当時二七歳という魯大海の年齢から，周樸園の生年も推定できる。生誕地は不明である。一部の中国の学者は無錫としている[註14]。侍萍との恋愛が無錫で行われたからだが，この推定には疑問がある。第二幕で周樸園と約三十年ぶりに対面した侍萍は「あなたは結婚すると，すぐ引っ越した」[註15]と言う。周樸園は彼女が侍萍だと気がつく直前に，死んだと思い込んでいる侍萍の墓を探すため「私は人を派遣して尋ねたことがある」[註16]と語る。周樸園の実家が無錫なら，結婚してすぐ引っ越す理由はないし，無錫の事を尋ねるのに人を派遣する必要も無い。周樸園は侍萍に無錫なまりがあることに気がつく。周樸園が無錫育ちなら侍萍はすぐに周樸園にも無錫なまりがあることに気がつき，「だんな様はそこの人ですか？」[註17]とは尋ねないだろう。周樸園の実家は無錫に代々住み着いている地主ではなく，無錫に拠点がある大商人でもなく，恐らく一定期間で各地を転任する清朝高級官僚であろう。樸園という彼の名は蘇州にある園林の名だが，このような優雅な名をつけた彼の実家は，一定の伝統教養を持った家庭であることが推測できる。周樸園の実家の所在地は，結局不明である。

周樸園の幼少期についても読者・観客が知りうる情報は少ない。兄弟姉妹の存在もわからない。周樸園が周家の年長者と同居していないところをみると，おそらく長男ではないであろう。読者・観客は周樸園が若い頃ドイツに留学し，数年して帰国したということがわかるだけである。

『雷雨』には周樸園ドイツ留学の具体的な時期は記されていないのだが，一般には一八九〇（光緒十六）年頃とされている。筆者の知る限り，一八九〇年を最初に提起したのは，一九五九年に上海人民芸術劇院で『雷雨』を演出した呉仞之（上海戯劇学院副院長）である[註18]。晏学は一八九四年甲午（日清）戦争前後に帰国したと述べ[註19]，間接的に一八九〇年頃留学を支持している。ただし両者とも具体的な根拠は示していない。瀬戸宏は二〇〇〇年に呉仞之の説に拠って周樸園のドイツ留学を一八九〇年とした[註20]。

中国人の海外留学は，一般には一八六一年以来の洋務運動から始まる。曾国藩，李鴻章ら清朝高級官僚は，西洋の科学技術を取り入れるため留学生を欧米に派遣したのである。一八七六年清朝がドイツ・ベルリンに七名の下級軍人を軍事技術習得にために派遣したのがその実質的な最初とされる。その後清朝派遣留学生の留学先はイギリス，フランス，アメリカが主となったが，ドイツ留学生も少数ながら存続した[註21]。周樸園がなぜ英米仏ではなくドイツに留学したか，ドイツで何を学んだか，『雷雨』からは読み取れない。しかし周樸園が一八九〇年頃ドイツに留学したという設定は，十分ありうることなのである。一八九五（光緒二一）年日清戦争（甲午戦争）敗北後からは，欧米留学もなくなったわけではないが，日本留学が圧倒的になる。

周樸園が留学した一八九〇年代前半のドイツは，ちょうどビスマルクが制定した社会主義者鎮圧法が一八九〇年に失効し，社会主義労働者党がドイツ社会民主党と党名変更し，一八九一年にはドイツ社会民主党は基本的にマルクス主義の立場に立つエルフルト綱領を決定するなど，社会主義運動や労働運動が大きく発展している時期であった。エンゲルスはまだ健在だった[註22]。このような社会状況は，二〇代前半の周樸園青年に強い影響を与えたと思われる。第一幕で労働運動に好意を示す周冲に，周樸園はこう言う。

「おまえは社会とは何か知っているか？おまえは何冊社会経済の本を読んだんだ？私がドイツで勉強していた時，この方面では，おまえの中途半端な社会思想よりもずっと徹底していると自負していたのを覚えている

ぞ。」[註23]

周樸園は明らかに社会主義思想，マルクス主義に接している。田本相は『曹禺劇作論』で「彼（周樸園ー引用者）は流行の社会思想を追った人物であることがわかる」[註24]と評しているが，当時のドイツの流行の社会思想はマルクス主義である。社会経済という言葉からは，周樸園はドイツ語で『資本論』を読んでいたかもしれない，と思わせる。

中国の研究者には，この時期の周樸園の思想を民主派[註25]，「西側ブルジョア階級の“自由，平等および博愛”」要素の持ち主[註26]とする人もいる。青年周樸園がマルクス主義と同時に民主派，一九世紀末のブルジョア思想に接していたことは矛盾するものではない。周樸園がかつて社会主義，マルクス主義に接していたと思われることを，中国の研究者は指摘しない。共産党政権の中国では，マルクス主義を信奉していた者が冷酷な資本家に変貌していくことを指摘するのはためらわれるのか。しかし資本主義が長く続きかつマルクス主義の影響が一時期かなり強かった日本の歴史からみれば，学生時代にマルクスやレーニンの本を読み，さらに共産党や新左翼などの左翼政党，政治団体に参加していた者が，大学を卒業し年齢を加えるに従って左翼思想を急速に失い，資本家や保守政治家，学者評論家に変貌していった例は決して珍しいことではないのである。

三　侍萍との恋愛とその破局

一八九〇年代前半のドイツはまた，自由劇場運動の一環である自由舞台（Freie Bühne）が一八八九年にイプセン『幽霊』上演で活動を開始したように，三十年後の中国五四運動期にも似た文化思想状態にもあった。このような中で周樸園は社会的平等などの左翼思想と同時に，近代恋愛観[註27]など近代的価値観も身につけていったのであろう。帰国直後の侍萍との恋愛は，そのような思想の具体的実践でもあった。

『雷雨』の中で周樸園と侍萍の恋愛は，第二幕の三十年ぶりに再会した周樸園と侍萍の対話の中で断片的に語られているにすぎない。周樸園は帰国後まもなく無錫で，周公館の召使い梅おばさんの娘で当時は梅侍萍という名のやはり周家の召使い侍萍と恋愛関係に陥った。そして侍萍は一八九四年頃に周樸園の子，周萍を生む。しかし周樸園は急に「お金持ちで格式の高いお嬢さん」と結婚することになり，侍萍は光緒二十年大晦日に，周萍は家に残し生まれて三日の魯大海と共に周家を追い出される。侍萍は川に身投げするが，助けられる。周家では侍萍は死んだと思い込む。以上が『雷雨』から直接知ることができる周樸園と侍萍の恋愛の全てである。

この周樸園と侍萍の恋愛についてのまとまった考察は少ない[註28]。材料があまりに乏しいからであろう。しかし二人の恋愛の実情を推測することは，周樸園と侍萍という重要人物の性格と境遇の背景を知る上で極めて有意義だと思われる。以下，限定された材料から二人の恋愛の復元を試みてみたい。

上流家庭の若だんなが召使いと関係を持つのは，珍しいことではない。しかし周樸園と侍萍の関係が当時の一般的関係と著しく異なっていたのは，周樸園が侍萍を対等の存在として扱ったと読み取れることであった。

周樸園と侍萍の関係が悲劇的な終結をした後，周樸園は侍萍の居室の調度などをそのまま維持し，特に侍萍を「正式に周家に嫁いだ人」[註29]とみなしたのである。周樸園と侍萍の間には，おそらく大家庭の中の青年群像を描いた巴金『家』の高家三男の覚慧と召使い鳴鳳のような麗しい恋愛関係があったのであろう。『家』の二人は，少なくとも覚慧からみれば対等の恋愛関係として性関係はなかったものの心を通わせ合っていた。しかも周樸園と侍萍の恋愛関係は，『家』の約三十年前の一八九〇年代のことなのである。当時の中国には，西洋近代思想はまだほとんど流入していなかった。西洋近代恋愛観の中国流入開始を告げるとされる小デュマ作，林紓・魏易訳『巴里茶花女遺事』（椿姫）が翻訳刊行されたのは，二人の恋愛の少し後の一八九九年のことである。こうみていくと，当時の周樸園の恋愛思想が中国でいかに例外的，革新的であったかが理解できるであろう。この主人と召使いを対等とみなす当時の中国にあっては破天荒の恋愛観，価値観が，周樸園のドイツ留学体験からもたらされたことは，間違いないことであろう。

重要なことは，青年周樸園はこのような近代的恋愛観を，自ら実行したと読み取れることである。周樸園と侍萍の恋愛は当時の封建的な道徳規範に著しく反するので，公然化した時から周家の老世代の反対を受けた筈であるが，周樸園はある時までは自己の意思を貫き通した。侍萍が周萍を生んだ時ほぼ正妻としての扱いを受けていたことは，周樸園の意思を示している。周樸園がもし簡単に老世代と妥協してしまう性格であれば，侍萍が正妻に準ずる扱いを受けることは不可能であったろう。

しかし『家』の覚慧と鳴鳳の恋愛も悲劇に終わったが，一九世紀末の晩清に近代恋愛を実行した二人を待っていたのは，もっと残酷な結末であった。周樸園と名家のお嬢さんとの結婚，侍萍の追放については，一九八〇年代半ば頃までは周樸園が主体的に実行したとする見解が主流であった。しかし，『雷雨』を読んでいく限り，侍萍の追放などは周家の老世代が中心的な役割を果たしたとみる方が，より合理的に周樸園の立場と感情を把握できると思われる[註30]。

具体的な理由はわからないのだが，周家では周樸園を急いで「お金も格式もあるお嬢さん」と結婚させる必要

が生じた。この時周樸園はまだ青年で，周家の意思決定権は老世代に握られていた。当時の結婚は個人の結びつきではなく，家と家の結びつきを示すもので，結婚の決定権は家長にあった。結婚する男女が結婚式の当日に初めて顔を合わせた，というよく知られている中国の旧式結婚は，この事情を物語っている。

周樸園の結婚の背後には，あるいは周家の存続に重大な影響を及ぼすような事情が存在しており，周樸園は侍萍と結婚したいという彼の意思を貫き通すことが困難だったのかもしれない。わかっていることは，周樸園は結局この周家の巨大な圧力に抗することができず，このお嬢さんと結婚させられてしまったことである。もし周樸園と侍萍の恋愛が五四運動以後のことであったなら，周樸園は恐らく決然と侍萍を連れて周家を脱出し新しい家庭を築いたことであろう。だが，時代はそれから三十年前の晩清であった。周樸園は前近代社会規範の圧力に屈服し，結婚を受け入れ侍萍を棄てることを選ばざるを得なかったのである。

もし侍萍が正妻に準ずる扱いを受けず，妾の待遇に甘んじていたなら，周樸園の結婚は避けられなくても，周家を追い出されることはなかったかもしれない[註31]。当時の社会規範は妻妾同居を許容するものであった。しかし侍萍は正妻としての待遇を受けていた。妻妾同居はできても，一つの家に二人の正妻を置くことは不可能である。また侍萍は晩清の時期に当時の社会規範と異なる恋愛を実行し正妻の待遇を受けていたことで，周家の老世代の反感を買っていた可能性が強い。侍萍も，周家の正妻になれると思い込み（周樸園は彼女にそう言っていた筈である），周りの者に正妻風を吹かす，少なくとも周家の老世代にそうとられる言動があったのかもしれない。第二幕で周樸園と再会した侍萍が言う「彼女は賢明ではなく，しかもあまりお行儀がよくなかったそうです」[註32]という台詞，第三幕で四鳳に言う「お母さんは一歩歩みを間違えると，次々に歩みを間違えたのよ。（中略）人の心は頼りにならない，人間が悪いと言うのじゃなく，人の性格はあんなにも弱く，簡単に変わるのを恨むのよ」[註33]という台詞は，それを示唆しているのかもしれない。上述のように侍萍は光緒二〇年大晦日に長男とは生き別れになり，生まれて三日の次男ー魯大海を連れて雪の中を周家から追放される。侍萍によれば，この措置を直接決定したのは，周家の老夫人であった。老夫人の原文は老太太で，周樸園の母ではなく祖母かもしれない。一般的に，封建社会であっても侍女が円満に家を離れる時はしかるべき金品を与える筈である[註34]。周家のこの残酷な仕打ちは，規範を破った侍萍に対する周家老世代の反感の表れ，復讐かもしれない。民国期においても中国の家庭では，老世代の女性が社会規範を破った若い女性に残酷な処置をすることがある[註35]。侍萍は第二幕で周樸園に「あなたはたぶんもう自分のしたことを忘れたのよ！」と言うから，おそらく周樸園は侍萍の追放を侍萍に直接告げたのであろうが，すぐ後の「あなたたちは無理やり私を大雪の中で周家の門から追い出したのよ」[註36]という侍萍の台詞は，侍萍の追放が周家全体で行われたことを示している。

その後の事態も，侍萍追放は周樸園の本心ではなかったことを示している。侍萍の誕生日の四月十八日を毎年忘れず，侍萍を正妻として扱い，何回転居しても侍萍の部屋の家具をそのままにし，周萍を生んだ後に病気でいつも窓を閉めていたという習慣も約三〇年間保ち続けた。「おまえを忘れないため，私の罪を補うためなのだ」[註37]と周樸園は再会した侍萍に言う。『雷雨』前半最大の山場である第二幕周樸園と侍萍再会場面の周樸園の心理分析は，別に侍萍の形象を論じる機会に行いたい。

上述のように一九八〇年代前半ぐらいまでの周樸園論は資本家は悪人という前提から出発していたから，周樸園のこれらの行為を偽善，虚偽としていた。しかし硬直した階級論が崩壊した今日，周樸園の行為は彼自身が言うように，心から愛した女性を自己の意に反して棄てざるを得なかった周樸園の強い罪悪感と家に対するせめてもの抵抗の表れと考えた方が，死んだと思っている恋人の部屋を約三〇年維持するという一般的には異常な行為の原因を，より合理的に説明できると思われる。

侍萍追放は，青年周樸園がドイツから持ち帰った理想あるいは近代的価値観の重大な挫折であった。おそらくこの時に，周樸園の青春は終わったのである。周樸園は，中国の現実に妥協し屈服せざるを得ない自己を強制的に自覚させられた。これは，ドイツで獲得した理想の放棄，“早すぎた近代”の崩壊でもあった。こうして，周樸園は社会主義思想，民主思想を失い，まもなく利潤のために平然と二千二百名の労働者を溺れさせ，自己の鉱山ストライキを暴力で弾圧する冷酷な資本家に変貌していくのである。

ただし，周樸園がドイツから持ち帰った近代価値観がすべて消失したわけではない。『雷雨』からは，周樸園がその後もある種の近代価値観を持ち続けたことが読み取れる。これが周樸園の人物形象を複雑なものにしている。この問題は五節で考察したい。

四　最初の妻の謎

これ以後の周樸園を考察する前に，一人の女性について語っておきたい。「お金も格式もあるお嬢さん」とのみ紹介されている周樸園の最初の妻である。この妻についての情報は侍萍以上に少なく，名前すら記されていない。第二幕での侍萍の台詞がすべてである。彼女が蘩漪でないことは，明らかである。蘩漪は何度も，結婚し

て一八年と語っているからである。この最初の妻はどうなったか，『雷雨』にはまったく書かれていない。

曹禺は，最初の妻は死んだ，と談話の中で述べている[註38]。中国の研究者にも，曹禺の発言を受けて，最初の妻は死んだ，としている人が多い。周樸園と蘩漪の結婚は周冲の年齢から一九〇四年頃と推測されるので，死亡したとすれば一八九五年から一九〇四年以前ということになる。

周樸園は，この最初の妻に対して徹底して冷淡な態度をとっている。侍萍に対しては，約三十年間居室を維持してきたのに，この女性は話題にもしていない。周家の家族，召使いに至るまで最初の妻に無関心で，最初の妻は存在していないかのようである。周樸園はこの女性と性格も不一致だったのかもしれないが，本質的にはこの女性との結婚が意に沿わぬものであったことが理由であろう。

この最初の妻に，別の可能性は考えられないだろうか。最初の妻は，死なずにその後も周樸園の実家で生き続けている可能性はないだろうか。

こう述べるのは，根拠がある。曹禺には家瑛，家修という姉，兄がいたが，彼らの生母は曹禺の生母ではない。父親の万徳尊は日本に留学する以前に郷里の潜江で結婚し，家瑛，家修が生まれていた。この妻は，燕氏という名前だけが伝わっている。万徳尊は日本から帰国すると天津に居住し，曹禺の母の薛氏を娶った。重婚であるが，当時の中国では違法ではなく，社会規範もこのような結婚を許容していた。そして一九一三年に家修，家瑛が天津に出て来ると潜江との関係は途絶え，曹禺の家族も最初の妻を話題にすることもなく，曹禺は後年，彼女がどうなったか，彼自身もまったくわからない，と語っている[註39]。

兄の家修は曹禺が清華大学入学などで天津を去った後も曹禺の養母薛咏南と共に天津で暮らし，二人の子がいた。長男は一五歳で夭逝したが次男で一九三三年生まれの万世雄は一九三七年に家修が死去した後は義母（家修の後妻）と義祖母の薛咏南に育てられ，その後は天津大学理工系教員となった。薛咏南と逝去まで生活を共にし，『曹禺研究』に回想録を発表している[註40]。それを読むと，万世雄は血縁のない薛咏南を祖母と呼び，実の祖母である燕氏については，わずかに一九四三年実兄が逝去した時から年越しの日に祖父（徳尊），燕夫人，薛夫人，父（家修），母（張夫人）の名を書いた紙を紙銭と共に焼く法事の祭主となった，燕氏は一九四四年頃には故人になっていたと書かれているだけである。燕氏は血縁のある実の孫にも忘れられているのである。

周樸園と周萍の関係など周家の雰囲気に万家の状況が反映されているのはよく知られているが，周樸園の最初の妻と燕氏の間にも，類似性が感じられる。あるいは，周樸園は最初の結婚を結婚と認めたくなかったのかもしれない。一つの仮説として，提出しておきたい。

死亡にせよ生存にせよ「彼女の運命は梅侍萍よりももっと悲惨で，もっと無価値」であり，「旧時代の中国女性の最も悲惨な運命を表している」[註41]ことは，確かであろう。

五　家長としての周樸園

『雷雨』事件当時の周家が一般的に言われるような大家庭ではなく核家族であり強い近代性（modernity）を有していることは，筆者は別の場で指摘した[註42]。周樸園がこの時点での周家の家長であることは確かだが，家長としての周樸園の性格はどのようなものであろうか。

周樸園は第一幕の彼が登場する場面での人物説明に，“日常的な専横，自己肯定，屈強さ”に満ちていると記されているところから，これまで独裁的な人間として理解されてきた。本稿第一節で述べたように，特に一九八〇年代前半までは，それに硬直化した階級性理解が加わり，封建遺制を強く残した資本家として，否定的人物としての周樸園像を形成してきた。『雷雨』は人物の性格が台詞での説明だけでなく人物の行動として，すなわち劇として表現されている。周樸園の専横を示す代表的な場面は，第一幕終わりの薬の場であろう。蘩漪は精神を病んでいると周樸園は考え，とても苦いからといやがる蘩漪に四鳳に煎じさせた中薬を飲むよう強く迫る。それでも飲まない蘩漪に，周樸園は周萍に薬を捧げ持たせ，蘩漪はどうしようもなく薬を飲まざるを得ない。『雷雨』の見せ場の一つである。このほかにも，周樸園の専横を示す登場人物の台詞は，『雷雨』の中で頻出する。周樸園の性格に，封建遺制あるいは前近代性が存在しているのは確かなことであろう。

しかし『雷雨』を丁寧に読むと，周樸園の行動には必ずしも独裁的，封建的とは言いがたい部分も存在していることに気がつく。特に蘩漪に対する対応である。

事件の前々日及び前日，昼間は恐らく炭鉱争議への対応で多忙を極めた周樸園が，夜にようやく時間をみつけて蘩漪に会おうとしたが，二日とも蘩漪は部屋に鍵をかけて会おうとはしなかった。しかも事件前日は周樸園の誕生日だった[註43]。家庭秩序を重んじる当時の上流家庭で，家長の誕生日に妻が会って夫を祝福しないというのは，異常なことと言わなければならない。

もし周樸園が真に前近代的独裁者であれば，自分の意思を貫き通し強引に蘩漪と会おうとしたであろう。周樸園にはそれだけの力がある。ドアを激しくたたいて蘩漪にドアを開けさせる，あるいは召使いに合鍵を持ってこさせてドアを開ける，などやり方はいくらでもある。周樸園が望めば，召使いに命じて斧などでドアをたたき壊

し，さらに夫の命令に背いたとして殴り，蘩漪に恐怖心を与え二度と周樸園に逆らえないようにさせることも可能であろう。しかし，周樸園はそのどれも行わず，蘩漪が周樸園と会いたがらないことを知ると，静かに引き下がる。周樸園は蘩漪に高熱があり病気だと思っていることもあろうが，周樸園は蘩漪の人格を尊重しているのである。この蘩漪の“病気”は，仮病である可能性が強い[註44]。

第四幕始めの雨に濡れた蘩漪に周樸園がどうしたのかと尋ねる場面も，逆らい口答えする蘩漪に周樸園は辛抱強く，何度も穏やかに二階に上がって休むよう語りかけている。短気な男性なら，蘩漪を怒鳴りつけていてもおかしくない。

薬の場面も，周樸園は蘩漪の病気を心配しているからこそ，薬を強制的に飲ませるのだと解釈することもできる。蘩漪に対してだけではなく，周樸園が家族を殴る場面もまったくないこと，登場人物の台詞からも窺えないことにも注意したい。家庭内暴力は，中国日本を問わず二一世紀二〇年代の今日でも深刻な問題だが，一九二二年頃の周家に家庭内暴力がみられないことは，周樸園の性格に個人の尊重という近代性がみられることの証左であろう。

ほかにも，周樸園は第二幕で，自分が不在の間の周萍の不品行を厳しく指摘し叱りつける。これも周萍への愛情の表れであろう。第四幕では炭鉱に行こうとする周萍に，いろいろと言い聞かせるのだが，周萍に対する父親としての愛情があるからこそ，このように言うのであろう。

次男の周冲は，第一幕で魯大海に同情的な思いを周樸園に語り，周樸園に反論される。さらに自分の学費の半分を使って四鳳を援助したい，という思いを周樸園に話そうとして，薬の場の周樸園の横暴をみて止めてしまう。だが周樸園は第四幕すなわち当日の夜に，周冲に薬は飲んだか，スポーツはしたかなど優しく語りかけ，続いて周冲に「おまえ今朝自分の学費を出して人助けをしたいと言ったな。言ってみなさい。認めてやれるかもしれない」[註45]と周冲が言いかけて飲み込んでしまった事を尋ねる。このような場面は，かつては周樸園の虚偽，偽善の現れと見なされてきた。しかし『雷雨』を読む限り，周樸園の家族に対する態度は，むしろ愛情が感じられる場面が多いのではないか。周樸園は第一幕の終わりで「私の家庭は，最も円満で最も秩序ある家庭でなきゃならない」[註46]と語る。これも周樸園の封建性あるいは偽善の表れと解釈されてきた。しかし円満な家庭を築きたいと願うこと自体は，近代性と決して対立せず，またいかなる社会にあっても家族を持つ者として当然の願望ではなかろうか。

周冲はテニスという西洋伝来のスポーツをし，召使いの四鳳は当時流行はじめた乳房を締め付けない天乳[註47]であるが，周樸園はとがめる様子はない。周樸園に妾の存在がみられないことも，注意しておきたい。これらは，周樸園には，他人，特に女性の人格を尊重するという，ドイツ留学以来の近代的価値観が残っていると考えるほかない。

ただし，周樸園の性格に近代性が存在することと，周樸園が家族に対して抑圧的になることは必ずしも矛盾することではない。家族を心配するからこそ，自己が正しいと考えるやり方を家長として家族に強要する。マルクス主義フェミニズムは，近代社会に入って資本制維持のため男性を長とする家父長制が維持・再編されたことを指摘する[註48]。企業経営者，資本家としての周樸園は，第二幕後半での乱入した魯大海に対する妥協の余地のない対応にみられる冷酷さ，さらには悪辣さを示す。資本家としての冷酷さも，近代価値観とまったく矛盾するものではあるまい。資本家と資本主義について言うなら，資本家は人格的に優れた人であっても利潤追求のため悪辣なことをせざるを得ない，というところに資本主義の特徴があるのではなかろうか。

周樸園の立場からみても，『雷雨』事件は，二人の息子は死亡し，妻は発狂し，彼の願望とは逆に「円満な家庭」が崩壊するという悲劇であった。ただし周樸園の悲劇性は，他の登場人物とは異なっている。序幕・尾声に登場する周樸園は老いを示してはいるが破滅はせず，自殺も発狂も逃亡もせず，自暴自棄にもならず，依然として資産家であることも示唆されている[註49]。序幕・尾声の精神に異常をきたした蘩漪・侍萍を見舞う悄然とした周樸園の姿に，自己の行為が願望とは逆に悲劇を招いてしまった人物の無限の悲哀をみるか，“諸悪の根源”が生き延びるという運命の皮肉をみるか，読者・観客の立場により解釈は異なるだろう。

六　結語

文革終結以前の周樸園評は，資本家であり封建要素が残っているから人格も悪辣というものだった。しかしこれまでみてきたように，周樸園の人物形象には個人の尊重や人間味も相当にみられるものであった。筆者は周樸園の性格，行動に前近代的封建的要素がみられないと言っているのではない。しかし，周樸園の言動をみる限り，周樸園は封建要素と同時に近代的要素をも有している。そしてこれが，周樸園の人物形象を複雑なものにしている。その複雑さゆえに周樸園は悲劇の原因となり，彼自身も悲劇の人物となる。このような近代性と前近代性が入り混じった複雑な人物像は，1920年代30年代の中国では珍しいことではなく，これ自体が近代の一つの産物であろう。そして周樸園の人物形象の近代性は，『雷雨』全体の近代性の重要な構成要素であろう。

注

「　」『　』は日本語文献を，《　》は中国語文献を指す。

1．《曹禺全集》（花山文芸出版社，1996年）第一巻p63。《雷雨》のテキストには複雑な経過があるが，本稿では現在は定本になっている文化生活出版社版（第９版以降）に基づく《曹禺全集》版を用いる。以下，《曹禺全集》第一巻は全一と略記する。引用文訳文は拙訳。

2．ＣＮＫＩ（中国知網）で周樸園を題名に含む論文を検索すると，2022年８月25日現在371編に達し，《雷雨》登場人物を題名に含む論文中最も多い。

3．晏学《曹禺和他的戯劇人物》（四川人民出版社，2011年）p59。

4．《<雷雨>序》全五p20。

5《我対今後創作的初歩認識》．全五p45

6．《関于<雷雨>在蘇聯上演的通信》全五p56

7．《曹禺談<雷雨>》（王育生整理），王興平，劉思久編《曹禺研究専集》上（海峡文芸出版社，1985年９月）p177-178収録，初出は《人民戯劇》1979年３期。この談話記録は《曹禺全集》第七巻収録版では省略・圧縮があるので，初出の形態を保っている《曹禺研究専集》版を用いた。

8．夏竹《曹禺与語文教師談<雷雨>》，《曹禺研究専集》上p197～198

9．夏竹《創作的回顧－曹禺談自己的劇作》，《曹禺研究専集》上などに収録されている。

10. 紅衛江《響的什麽雷？下的什麽雨？－批判反動劇本<雷雨>》，池周平編《<雷雨>研究資料》（長江出版社，2020年）p136。

11. 潘克明編著《曹禺研究五十年》（天津教育出版社，1987年）p15～24。

12. 銭谷融《<雷雨>人物談》（上海文芸出版社，1980年）p16。

13. 田本相《曹禺劇作論》（中国戯劇出版社，1981年）P50。

14. 晏学《曹禺和他的戯劇人物》など。

15. 全一p102。

16. 全一p98。

17. 全一p97。

18. 呉仞之《関于話劇『雷雨』的導演》（《文匯報》1959年12月７日）。

19. 晏学《曹禺和他的戯劇人物》p62。

20. 瀬戸宏「曹禺『雷雨』の近代性」（『野草』65号，2000年）p39。

21. 章開沅・余子侠主編《中国人留学史》（社会科学文献出版社，2013年１月）第一章三《欧陸求“技”》p57～74。

22. 木村靖二編『ドイツ史』（山川出版社，2001年，新版世界各国史13），成瀬治・山田欣吾・木村靖二編『ドイツ史３－1890年～現在』（山川出版社，1997年）などによる。

23. 全一p64

24. 田本相《曹禺劇作論》p48。

25. 晏学《曹禺和他的戯劇人物》p63。

26. 郭懐玉《重評<雷雨>中的周樸園》（《文芸争鳴》2010年24期ｐ86）。

27. 男女平等と恋愛当事者至上主義を中心概念とする恋愛観。張競『近代中国と「恋愛」の発見：西洋の衝撃と日中文学交流』（岩波書店，1995年６月）参照。

28. 近年は郭懐玉《重評<雷雨>中的周樸園》など周樸園の侍萍への愛情は純粋であったという観点から周樸園と侍萍の恋愛を考察する論文が現れている。しかしまだ1890年代当時の周家と十分に関連づけて二人の恋愛を論じているとはいえない。この時期の家庭内の女性の立場については，『雷雨』を直接論じたものではなく，また論じた時代が少し下るが，白水紀子『中国女性の20世紀　近現代家父長制研究』（明石書店，2001年）が参考になる。

29. 全一p25。

30. 31. 郭懐玉《重評<雷雨>中的周樸園》など。

32. 全一p28。

33. 全一p137。

34. たとえば，『家』の鳴鳳が馮楽山に妾として譲り渡される前夜を描いた26章で，高家主人の妻周氏は鳴鳳に，良い衣服数着と首飾りを作ってあげよう，と語りかけている。

35. 白水紀子『中国女性の20世紀　近現代家父長制研究』第一章「中国の家父長制－民国時期の『母の権力』」参照。

36. 全一p101。

37. 全一p102。

38. 《曹禺談<雷雨>》（王育生整理），《曹禺研究専集》上p179。

39. 田本相・劉一軍編著《苦悶的霊魂－曹禺訪談録》（江蘇教育出版社，2000年）p118。

40. 万世雄《回憶叔父曹禺和万家正宗》《曹禺対大嫂的尊敬》（《曹禺研究》第四輯，中国文史出版社，2007年），万世雄《曹禺和天津万家》（《曹禺研究》第十一輯，長江文芸出版社，2014年）。燕氏に触れているのは《回憶叔父曹禺和万家正宗》。

41. 陳思和《周樸園的三個女人》。この論文は筆者が本稿準備中の2022年上半期にはCNKIで検索できたが，なぜか2022年９月以降は削除されている。論文は2022年10月25日現在，中国作家網に全文転載されている。ネット掲載のためページ数記載不能。http://www. chinawriter. com. cn/n１/2020/0210/c404064-31578880. html?from=timeline&isappinstalled=０

42. 瀬戸宏「曹禺『雷雨』の近代性」。

43. 第一幕で魯貴は旦那様の誕生日ということで四元貰っている。全一p33。

44. 第一幕で周冲は周樸園に「母親原来就没有什麽病。」（全一p63）と言いっている。

45. 全一p149。

46. 全一p56

47. 瀬戸宏「曹禺『雷雨』四鳳の乳房描写について」（『中国文芸研究会会報』第484・485合併号）参照。

48. 上野千鶴子『家父長制と資本制：マルクス主義フェミニズムの地平』（岩波書店，1990年）参照。

49. 序幕で姉は弟に，狂った蘩漪を「お金持ちの奥様」と説明している。これは，『雷雨』事件の十年後も，周樸園は依然として資産家であることを示している。

（大阪公立大学大学院文学研究科UCRC研究員）

【2022年８月26日受付／2022年11月４日受理　『都市文化研究』編集委員会】

The image of ZHOU Puyuan in CAO Yu's *Thunderstorm*

Hiroshi Seto

Cao Yu's "Thunderstorm" is a masterpiece of Chinese drama. Zhou Puyuan, a character in "Thunderstorm", is the owner of the Zhou family, the main setting of "Thunderstorm", the chairman of the coal mining company, and the key person in "Thunderstorm". Zhou Puyuan is the character most discussed among the characters in "Thunderstorm", and he is also the character whose interpretation has changed greatly with the changing times. In this paper, after reviewing the history of changes in evaluation of Shumonen, I explored the characteristics of the image of Shumonen in line with the text of "Thunderstorm" as follows.

After the founding of the People's Republic and before the period of reform and opening up, Zhou Puyuan was perceived as a negative capitalist and a negative person, reflecting the trend of the times. After the period of reform and opening up, it reflects the trend of the times, and is not necessarily a villain, but a person with complex humanity. Zhou Puyuan's family probably came from a high-ranking bureaucrat of the Qing dynasty, and Zhou Puyuan's study in Germany coincided with the rise of the socialist movement in Germany, which influenced Zhou Yuan. After returning to Japan, his love affair with Saiping was a practice of the idealism he had acquired in Germany, and greatly violated the social morals of the time. Due to family pressure, Zhou Puyuan's relationship ended in a catastrophe, and Zhou Puyuan married a rich girl. This is the bankruptcy of Zhou Puyuan's idealism, and after this Zhou Puyuan transforms into a ruthless capitalist. Although Shiping was banished, Zhou-yuan felt guilty and preserved the appearance of Shiping's room for about 30 years. As the head of the family, Shuuen certainly has feudal elements, but it also has strong modern elements such as respect for the individual and women. Zhou Puyuan, as a whole, has modern values, which is consistent with the ruthlessness of capitalists.

Keywords：CAO Yu, *Thunderstorm*, ZHOU Puyuan, modernity